調布をゆったり楽しくハッピーに!

わくわ〜く

2020年
11月

17号

特集

コロナに負けるな! ～ドキュメント～

緊急事態宣言下の『調布市内の福祉事業所』

発行：調布市福祉作業所等連絡会　企画・編集：調布コミュニティビジネス推進委員会「調布アットホーム」
デザイン：(有)パンデコングラフィックス　撮影：表紙・原子尚之

調布市福祉作業所等連絡会 ガイドブック わくわ〜く
わくわーく17号　2020年10月　発行　調布市福祉作業所等連絡会　調布市布田2-26-8-101　TEL.042-481-3201　fuku-renraku@tbz.t-com.ne.jp
企画・編集　調布コミュニティビジネス推進委員会「調布アットホーム」

life style

このページでは、障がい者の
生活の1コマをご紹介しています。

画集「長谷川清子 心の絵」
絶賛販売中!

スルーネットピンポンと絵を描くことが楽しい。

長谷川清子さんはとてもパワフルで明るい。いつも冗談を言っているので周りには笑いが絶えない。長谷川さんは右目が見えません。生まれつき弱視でしたが、家族や学校の先生にも気づいてもらえず、小学校時代は黒板が見えず、学校に行かなかったといいます。その後、結婚して2児の母となりましたが、交通事故にあい顔面を複雑骨折。同時に右目の視力も失ってしまいました。後遺症、さらなるさまざまな病気を重ねる中で、左目も年々見えなくなってきて、今は携帯電話にスレスレまで左目を近づけて画面が見える程度。長谷川さんの笑いには、そういう環境に負けない、明るく生きるという力強い思いが隠されています。

今、熱中していることは、スルーネットピンポンと絵を描くこと。スルーネットピンポンは鉛の玉が入った音の鳴るピンポン玉を、卓球と違って台上4センチに張られたネットの下を転がして打ち合う競技。「障がいに関係なく誰でも楽しめます。歴は7年。仲間と会えることが魅力で、人よりうまくなりたいと燃えています。

絵をはじめたのは60歳の時。描いてみると、まだなんとか目の見えた少女時代のカラフルな情景が蘇ってきました。きれいな着物を着て舞う役者やこどもの頃に憧れた光景。絵を描くことで、「心の中に美しいものが宝物のように眠っていたことを発見できました」と語ります。携帯電話で風景を撮影し、綿棒を使って少しずつ描きます。

息子さんが2人に孫も2人。長谷川さんは充実した生活を満喫しています。

※次号「わくわーく 18号」は、2021年3月に発行予定です。